

## 外は歩ける

みずき 啓

七つ上の姉の長男、町野裕之から電話がかかって来たのは、三十一年前のもう十二月も数え日に入ろうとする夜だった。

「妙子叔母さん、父がいよいよみたいなんです。血圧が八十と四十に落ちちゃって」と語尾を上げずらす。

「それで、母が看取りをお願いしますって」

「分かりました とにかく明日行きます」

電話を置き、動悸を収めると、今度ははたと困った。

幼い息子は昨日から八度五分の熱を出している。夫はアメリカ出張中。あと三日は帰らない。あれやこれ思案と逡巡を繰り返した。しかし、池袋（千早町）の義母（トキさん）を頼るしかなかった。

「竜一郎さん（義兄）が重体なんです。姉が来て欲しいって。輝昭さん今アメリカなんです。それで下のが熱を出してて連れてけないので、お義母さん明日秦野に来て頂けないでしょうか。食事は子供達にやらせませうから」

「いや おっくうだ」

「そうですね 分かりました」  
（おっくうだ）なんてよく言えるよ。途方に暮れてしまった。

義母は、結婚以来毎月欠かさず、六年後に義父が逝ってからは二泊三日で我家に来る。私の最初のお産の日、予定日を十二日も過ぎていたのに、月例訪問。夫と三人でドライブしていた。長女の啓子さんは千早町の近くの病院で、義父母の最初の孫を死産している。首に巻きついたへその緒が外れなかった。

年末年始は秦野で過ごす。正月三日に横浜の私の実家へ年始に行く途中、愛甲石田駅で義母は車から降りる。その時毎年トキさんは泣く。

夫が（おふくろは教員生活が長かったから、運動会や卒業式には呼んでやってくれ。喜ぶから）とまた二泊。子供も三人いると、どれも一回では済まない。式には私は母が筆筒ごと持たせてくれた着物（夫が私にはお金を使いたがらないので、洋服がない。市長より多額のボーナスを受け取りながら、一家は生活保護ま

がいで暮らしていた。トキさんは正体不明の年代物のスーツ。亡夫のらくだのシャツを隠すスカーフを、毎回クシャクシャ巻いていた。スカートの下から、ゴリゴリたくし上げた亡夫の股引がはみ出している。

「お母さん一緒に式に出て恥ずかしくないの」と子供。「恥ずかしくない。私の親じゃないもの。自分の親だったら恥ずかしいけど」

夏など、割烹着の下は何も着ないまま庭をうろつくトキさんは、地区でもちよつとした有名人だった。

そして、年二度の旅行。あれは（おっくう）だったのか。

翌日、息子の熱も七度台下がったので、窮鼠、私は子供たちを連れて（息子を負ぶうことになって町野は医者の家だから何とかなるだろう）トキさんの家を強行突破する腹を括った。千早町の夫の実家と要町の町野とは偶然、歩いて七分の距離。

千早に朝から電話したが何度も空振り。外出好きなトキさんが恨めしい。午後、やつと

「これから子供達を連れてそちらに伺いますから。喪服を持って行きます」

「えっ」

池袋からのバスを（要町小学校）で降りた。ここから町野へはバス通りを渡って右へ、実家へは左に折れる。しかし、歩いて四分のはずの家に迷いに迷って一時間近く、かなり暗くなってしまったが、たどり着かない。バス通りの向こうに見覚えのあるパーマ屋がある。まず姉宅へ行ってそこを出発点に実家に向かうことにした。千早へは義父と義兄の入院見舞い、葬儀を含めて十回位は行ってるだろうか。その際、何回か歩いて姉宅を訪ねたので、そこからなら土地勘があるかもしれない。

ドアは開いていた。後に知ったが二階で三男が寝ていた。電気を点けて居間に入ったが誰も居ない。その時勝手口から、姉が親しくしている私も顔見知りの松尾さんが上がってきて

「電気が点いたから見に来てみたの」（松尾さんも義兄や姉が気になって、何も手に付かないんだ）

「千早へ行くのにさんざん迷っちゃって、来ちゃった」横で長女（中学）がガタガタ体をくねらし続ける。

「お母さん 早く行こう 早く行こう。遅くなるよ」  
「もう一度やってみます」歩き始めると長女が

「ああもう 気が気じゃなかった。これを隠すので」

と、夫の喪服ケースを持ち上げる。

二度目も迷い道だった。完全に陽が落ち、子供たちに限界がきた。実家に電話をすると、千早町の隣の長崎

(実家から歩いて三分)の義姉が出た。

「郵便局まで来ていますけど、迷っちゃって」

「妙子さん、そこから動かないでください。動かないで」

じきに街灯のリンクの中に、美智子さんの将棋の駒みたいな顔が浮かび上がった時の安堵感は絶大だった。

驚いたことに、午前中電話しても居なかつたトキさんは、家の中を膝と両手で体を引き摺って移動していた。秦野駅から我家までバスで十五分。長い上り坂のある私でも歩いたことのないその道を、八十をとうに超えた義母は毎回歩いて来る、その健脚が。

洞んで小さいトキさんは健啖でもあった。伊豆の弓ヶ浜へ行った最後の夏のこと、ひどい渋滞につかまつてしまい、白浜近くでお昼のコンビニ弁当を買った。トキさんがゲットしたのはただ一人「大盛り」だった。あの時、九十に手が届いていたか？いなかっただか？

見たこともない位デカイピザが食卓に乗っていった。ちなみにトキさんは(ピザ)を(ピサ)と言う。

千葉の義姉と香港旅行したのが自慢話の一つ。

「はい 香港土産」と、香港のレストランで使った長いプラスチックの箸を私は渡された。洗ってあると思うが？

翌朝、残りのピザを食べ姉の家に向った。

食事は義母の分を含めて自分達で買い食いすること。特に、白いご飯は絶対に食べないと約束させた。

結婚六年目の十月、東大病院に入院した骨髄腫の義父(山百合が満開の我家の庭におりたつた義父は、その百合のように白かった。胸が衝かれ、ざわめいた)を見舞った。私たちが病院に着いたとたん、トキさんはどこかへ消えた。義父を見舞った後、車から私と子供たちは千早で降ろされ、夫は夜の付添いに病院に戻って行った。

夕食を用意しかけたとき、一斗缶の米櫃を開けると、まぶしたようにゴキブリの糞。何とか取り除こうと選り始めたが、絶望。来ていた千葉の上の姉に「お米買いに行ってください」

「お米ないんですか」

「ゴキブリの糞だらけなんです」

「えっ これ 胡麻じゃないんですか」

週に五・六日は泊りがけで病院に詰めていたトキさんは、殆んど外食だったらしい。

姉と裕くんの運転で、高島平団地を過ぎ上尾の病院（多分 癌センター）へ向かった。裕くんは怒ったように神経を尖らせていたが、姉は普段どおりだった。

三年前、五十七の義兄が白血病になった。その時彼は埼玉小川日赤の副院長をしていた。足の内出血に気づき血液検査をした。結果は最悪だった。

「本なんかぜえんぶ蹴散らかして、何もかもすつ飛ばして入院したのよ」と姉。義兄のショックの大きさが解る。まだ、白血病の治る時代ではなかった。最初に寛解になった時期、要町へお見舞いに行った。痩せもせず。太りもせず。短く柔らかくなつてはいたが黒い髪が生え揃い、いつもの浅黒い竜一郎さんだった。が、明らかに私達の訪問を喜んではいなかった。彼はもう世の中を、他人を捨てていた。

「原因は過労です。働き過ぎだったから」抑揚なく言う。彼は以前

「私の所だけに患者が集まってしまふ。二時になつても診療が終わらない、昼休みもなにもないですよ」

「臨床が好きでね。病院長は断つてる。診療がないか

ら」半ば自慢たれくそで言っていた。

階段の上の五畳程のフロアリングには図書館で見掛ける回転式の本棚が林立していた。義兄がせっせと古本を買い溜めた結果である。

姉が竜一郎さんの病室に行くことはない。

「彼は病院で治療に専念し、私は仕事と家のことに専念するの」（そんなものですか）

結婚前、感情過多症、ひらたく言えばおセンチだった姉は、いやに切り替えが速い、処理能力の高い、人間であれ物事であれすっぱりと割り切れる人になつていた。それが、義兄が要求した資質なのか。

息子たちと町野家の元居候、今は町野の灯りだつて見える松尾さんのアパートに住む土持さんは、見舞いに行っている。

姉の結婚は母が強く勧めたものだった。見合いの後、十一歳年上の竜一郎さんは長々と、ウンでもスーない。その後見合いした有名パラーの息子の若い医者に姉の気持は傾いていた、と思う。そこへ、いきなり要町の立派な新築の家に招待され、母は落城した。彼が住宅本を何冊も買い込んで、練りに練り、全財産をはたいた家だった。すでに土持さんとお手伝いと犬がいた。

私は大学受験で結婚式に出ていない。式当日、カメラマンの兄はチョンボな奴で、フィルムの写真を忘れて一眼レフでカシヤカシヤやった。それで、姉の鹿児島義母の顔は知らない。ただ式の後、日を置かず彼女は横浜に来た。

「わたしやあ　横浜のお父さん好きだよお。私と同じ田舎っぺえだからさあ」

帰りがけの階段を下りながらガラガラ言う彼女は、長く大阪府知事をやり、法相も務めた赤間文三の妹なのである。竜一郎さんに東大法科をでた統合失調症の弟タイジさん（一度要町で見かけた、物静かで容姿に優れた人）がいることを、告げにきたのだった。

「一人くらい仕方ないわねえ」父母は顔を寄せ合った。竜一郎さんには家庭持ちの姉も妹もいる。しかし、タイジさんと同棲している年上の女性イワイさんの弟、おしやべり鳥の一徳さんが、後々私にチョロツと、カッチャンとか、もう二、三人統合失調症の兄弟の存在を告げ口した。姉自身は鹿児島へ何度も行き勿論知っている。が、一言も横浜へ洩らしたことはない。覚悟して腹を括ったのだろう。息子たちが発症するかもしれない恐れに耐えた、姉の強さも思う。

兄の学友や近所の歯科医など、美人の姉は結婚を申

し込まれることが多く、町野との結婚はタル神輿に乗った程度に考えていたに違いない。義兄の遅い結婚には、子供を持つことへの逡巡があったのかもしれない。産婦人科医の鹿児島義父は、大学紛争花盛りの時期に、鹿児島大学学長になっていた。その関係で、文部省に頻繁に呼ばれては要町に泊まっていた。私も一度留守番を頼まれて会ったが、竜一郎さんを一回り小さく、品良くした人だった。孤独の匂いがした。

私が初めて要町へ行った時には、犬のユリは盗まれ、盗癖のあったお手伝いさんは去っていた。

キツチンの窓からバス停への小道が一本走っている。「毎日、〇時〇分に帰ってくるのが見えるのよ」姉は水を使いながら言う。ズバリ〇分に義兄の姿が現れた。ドラマの一場面のようなだった。

色黒の中肉中背、エネルギーシユと繊細さが微妙に入り混じる。眼鏡の下の良く動く、知識欲と好奇心で満杯の丸い目。母は（雄弁な人）と言っていたが、（おしやべり）と紙一重だろう。食卓で

「ママちゃん　もう半分お願いします」と徳利を振っていた彼は、夕食後、バケツと雑巾を持ち出し、キツチンとリビングの板敷部分を拭き上げる。姉の掃除の

仕具合もチェックする。

「朝の洗面だけで、洗濯したタオルを四枚使うのよ」  
刺身は柵で買い、洗って食べる。内科医の彼は鹿児島人には珍しく、減塩・減油を徹底していて、母が

「あの家のスキヤキには味が無い」

同じ東大医学部出身の兄は人付き合い好きのまるつきり普通の

「味の素でお好み焼き作ったら、うまいだろうな」などと、バカ男だった。

義兄は丸い人だが、作った〇であって、自分は一流の人間だとの自負が芯に座っていた。何事であれ、一ランク上を好んだ。その辺りが商売人には蜜の匂いにするらしく、デパートの外商やらが羽音を立てていた。売り付けられたやや高価な物品は、泥棒に入られたこともあって、貸金庫へ。貸金庫で転がっているだけの指輪など、ただの石ころと思うのだが。

姉を見せびらかしたが、姉も、自分は見せびらかせられる女だと思ひ、シャガールの二人のように世間から一ランク浮揚している積りになっている場面もあった。マンガだね。

その後、義兄の帰宅の時間はまちまちになり、古本

屋に寄り道もあり、勤務の後のクリニックのバイトもするようになった。姉も家裁の調停委員を始めた。

トキさんを連れて町野に行ったことはない。が、トキさんは集団検診の結果などを持ちたりして、町野に頻繁に出入りするようになった。私が怖れていたことだった。千早側の親戚を私は、それでなくても話の半分は人の悪口のトキさんから、同じ内容を繰り返し繰り返し、嬉しそうな悪口の形で教えられた。それは夫が側にいない時で（〇〇日、お袋を呼んでやって、までが彼の仕事。電話も私。母が現れても、お母さん来たので終わり。後は私の仕事）親戚に関して夫を抜き去って、詳しくなかった。

夫の居る、居ないでトキさんは七変化。いつも芝居がかっている人。役者だったら成功したのに。惜しい。

トキさんは甥、遠い親戚、知人、死んだ友人への線香あげだの、他所の家に上がり込むのが好きだった。ただし、姉達の婚家にはめったに、その親戚筋には決して行かない。迷惑かけると固く自重していたのだから。そして、行けば必ずその家のことをあれこれ批判する。〇〇へよく行くなあと感心していると、バツタリ行かなくなる。行けなくなる。用もないのに毎月長

時間居座られると、相手も辛抱が切れ？トキさんが言うには、小土産など手渡され（もう、来ないで）となる。ある東京に転勤になった若い親戚など、トキさんに電話で報告したとたん、子供を連れて彼女は外出中の社宅を急襲された。つれあいは彼女が帰宅するまで、延々四時間見知らぬ婆さんの相手をさせられたらしい。私に怒りと嘆きの電話。（貴女にトキさんに近づくと忠告したじやない、まあ、遅かれ早かれトキさんの餌食になるけど）トキさんの口癖に

「先様に何か用意させると、本当に申し訳ないことになるから、いつも電話しないで行くの」電話代をケチるのと、言い訳され断られるからに決まってる。

やはり、トキさんが町野へ行ったことは

「お姉さんはえらい。お兄さんは〇〇なのによく我慢している。わたしにやあともじやないけど」

「お姉さんはえらい。裕くん達が〇〇なのに」という形で知ることとなった。

町野に二人の義姉共々食事に招かれたりしていることは義母達の口からは聞いたことがなかったが

（もう、あんたを飛び越して町野と千早の付き合いな）と匂わせてくる。学芸大と芸大出の二人の義姉は仲が良く、実家のピアノでそれぞれクラスを持ってお

り、始終会っていた。それなのに、私の家での正月やトキさんのお祝い事などの折り、家族連中をすつぽかして、別の部屋で二人で女学生している。家族は顔を合わせてこそ続いて行くと思ひ、席を用意しているのに。ムカツク。

姉が彼女達をもてなしているには理由がある、と私は踏んでいた。鹿児島の義母とのバトルへの当てつけではないかと。（ほら、私は親戚と上手にやれるのよ。貴方のお母さんみたいな人でなきや）

義姉達は平々凡々、感じは悪くないが、面白味はない。内容のあることは言えない人達だった。

割を食ったのは私で、姉は千早の面倒を見てる顔。

私は姉に頭が上がらず

「横浜のお父さんが入院したの。正月で付添いさんが頼めないから、妙さん行きなさい」姉から指令が飛ぶ。

父が亡くなった後、トキさんは横浜へも月一で行きだし、妹にも頭の上がらぬことになった。

義兄は、大抵は身内の娘だったが、行儀見習い兼お手伝いを置くことを好んでいた。彼女達の部屋もあった。鹿児島の家風かもしれない。見合いをさせデートの次第などを逐一細かく質問する。そして結婚へと送

り出す。

居候の土持さんは、町野一家を自分の車に乗せて横浜へ来る。

「信号が赤くなるのも、僕の所為にするんだよ。妙ちゃん。裕くん達」夜帰るときは飲酒運転だった。竜一郎さんも平気だったのが不思議。

いつも穏やかな居候気質の土持さんだったが、一時期更年期になって、やたら怒りっぽい。(男でも更年期があるんだ)と目が開いた。

一徳さん(カズちゃん)も町野家の常連さんだった。ごつい、頑丈そのもののバツイチ男。病気や怪我は十分自分で治してみせると、医者いらず。

「法螺も数ふきや吹き当てる」などとデカイ声で一方的にしゃべりまくる。竜一郎さんも負けていず、デカ目をグリグリさせながら

「ちがう カズちゃんそりや違う」と大声合戦。傍迷惑だが至福の時間のように見えなくもない。

カズちゃんはプリマハム勤め。大きな肉の塊なぞ持って年に二回位横浜にも現れた。父はお酒が飲めるので歓迎だが、皆逃げてしまう。カズちゃんはいいい気持ちでしゃべりまくり、マイペースな父は相槌も打たず、飲みながらテレビ見ているだけ。時々チラッと相手に

目をやる。父が逝った後は、カズちゃんの正面に正座の母がカズちゃんの飛沫を浴びながら、気のない相槌を打っている。忍の一字。母は

「一徳さんの肉は美味しくないから嫌い」  
本当は一徳さんが嫌いと言いたい。

町野のリホームをやった建築家は、便利屋さん化し、リビングに顔をだす。この三人に共通しているのは、姉に懸想していること。カズちゃんなどは私に

「お姉さんは僕に冷たいんだよ。カズちゃんはうるさいから厭って。あのツンツンしているところが、僕はたまらなく好きだ」

三人で鞘当てする場面もあったらしい。義兄は秘かに楽しんでいたのではないだろうか。

上尾の病院は、病院長が義兄の、主治医が兄のクラスメートだという。

一面は天井まで窓の高い、しらじらと広い病室。竜一郎さんは酸素マスクの下で、反応なく、ただ昏睡していた。

「町野さんと話し合って、延命措置は取らない約束になっっています」

「この容態で声が届いているという説もあります。声



をかけて刺激してあげてください」主治医の土屋さんが言う。見つめるばかりで、立ったきり声が出て来ない。状況が私の中で消化されない。

鹿児島の遠縁に当たるといふ、施設勤めのがつしり重い中年女性が、専門家らしく無駄なく体を動かしていた。看護師が来て

「おそれいりますが、お席を外してくださいませるか」部屋の外に出た。頭はどんどんとりとめがなくなっていく。(私に何ができるのか?)

「あなたの姉さんは気性がきつ過ぎるよ」

鹿児島の家とのバトルの話だ。私はカッとして(姉は統合失調症の家系を知らされず結婚したんです。強くなるしかないでしょう)と嘔みつきそうになった。

「容態が悪くなっていくのが速い」彼女がボソツと呟く。そのまま帰って行く。

病院には個室の家族控え室がある。畳敷きと二段ベッド。テーブルセットもある広い部屋。夕方、町野で行儀見習いをしていた土持さんの姪の洋ちゃん、次に横浜の妹、ゆっこが現れ、大量の食料を差し入れてくれた。二人共、似た体型。洋ちゃんの持ってきた焼売は箱を開けると加熱される仕掛けだ。

妹は病室に入るなり、義兄の手を握って腕を取る。

そして義兄にのしかかり

「お義兄さん 起きて。ゆっこよ。お義兄さん 目え 覚まして 起きて」と大声。妹は育児でも介護でも、自然に手が出て自然に体が動きそれがセオリーに適う人だった。私みたいな、頭ばかりぎくしゃくしてしまふ人間とはまるでデキが違う。

私と町野の次男の達也が今夜の看取りをすることに なり、窓を背にベッドを前に二人で座った。ぼそぼそと話す。少し明かりを落とした部屋。天使のコスチュームの看護師たちがシズシズと入ってきて、聖歌を低く歌い、義兄の枕元にカードを置き、一札して出て行った。今夜はクリスマス イブだった。姉と裕くんも一、二度見に来た。達也と一晩取りとめない会話を続ける。夜回りの看護師が処置を終えて退室すると、達也が

「よくあんな汚い仕事ができると思わない」  
びつくりした。達也は千葉大の医学生だったから。もともと物理志望の彼を説得して医学に向かわせたのは、白血病療養中の義兄だった。

「医者より看護師さんを頼りにする患者も多いのよ」  
私は彼の将来を憂えた。

翌朝、ゆつこの夫、旬二さんも来た。

「ご飯食べといで」姉に言われ食堂へ。食堂から病室に戻ると、看護師が二人、義兄の世話をしていた。埼玉小川日赤の婦長達、元同僚が時々きて義兄の看護に当たっていたらしい。家族は遠巻きに座った。昼が来て、家族は順番に食堂に行った。姉に指示されて私も立ったが、昨日とは異なる見知らぬ町野系遠縁の女性と一緒に立った。小柄で品の良い愛らしさ、金の掛った装い。彼女はテーブルに着くなり、こちらの身元調査を始めた。つまり、姉の姉妹の夫の勤め先が一番の関心事らしい。彼女の夫は「NHK学園」の学長だかなんだかららしい。それから延々と学園やら夫の話に終始した。

レストランから戻り、病室のドアを開けた時、義兄の回りがいやにすつきりしていた。義兄の酸素マスクも取れている。二人の看護師も消えている。姉が

「亡くなったの」「NHK学園」は私に

「まあ、ながながおしゃべりしちゃって、臨終に会えなくて、ごめんさい」と泣きそう。

姉と子供二人が残り、私達は控室に移動した。

私はトキさんに電話を入れ、義兄の逝ったことを告げた。

「NHK学園」は消えた。

暫くして、病室に行ってみた。竜一郎さんの姿はベッドになく、姉達の姿もなかった。そして、今まで見掛けなかった三男の文則が、窓際で外を向きひっそりと立っていた。片手は愛しむように、手に感触を沁み込ませるように窓枠を撫でている。彼は中一だった。微妙な年齢である。今父親を失ったことが彼の生涯の瑕にならねばよいが。

竜一郎は花の溢れた立派な霊安室に移され、私達はお別れをした。

陽も落ちかけ、帰路は昨日と同じ三人だった。

「お母さん 抗がん剤よく効いたね」

「そうね」

義兄は未承認の、開発途上の薬も使っていたらしい。見せられた死亡診断書には（非A非B肝炎ウイルスによる肝炎）と記されていた。まだC型は発見されていない時代だった。竜一郎さんは結果的に輸血が引き金を引いたのだろう。

裕くんは運転しながらしゃべり続け、姉の気のない相槌が怠そうだった。

家々から明かりが漏れ、団欒の音まで聞こえそうな

時刻。

豊島区役所の正面玄関は勿論閉っていた。裕くんは死亡届けを出し、葬儀その他に必要な書類を貰いに、薄暗い裏口に廻った。

実家に戻った時、子供たちはとつと二階に上がって、義母一人そこが寝間にもなっている居間にいた。

「どうも 子供たちを見て頂きありがとうございます。義兄を見送ることができました」トキさんはぐるぐると向き直ると顎を上げ両肩を張る

「お昼に電話があつたきりウンでもスンでもない。一体どうなつて、いつ帰るやら、こつちは気ばかり揉んでオロオロするばかりだよ」私の弁解は打つちやつて、何回でも同じ言葉を繰り返す。こうなるとトキさんは檻を出たライオン。どこまでも突つ走る。私は「申し訳ありませんでした」と土下座した。そうすると、いつもトキさんは満足し、鉾を収める。これが彼女の思い描く嫁と姑の在るべき姿なのだ。私はマゾ気があるので、土下座などトキさんにしかしたことないが、いつもお茶の子さいさい。

翌十二月二十六日、朝は子供たちが買つておいた。パ

ンを皆で食べた。「お祖母ちゃんの家の中は歩けないけど、外は歩ける」と子供が言う。(妙なこともあるもんだ)と引つ掛かったが、町野のことで頭はいっぱい。トキさんはアウトドアの人。家事全般はトンチンカン。新婚旅行から千早へ戻ったとき「台所は聖域だから入っちゃダメ」義父と夫が止めるのは、新婚の私に気を使つてのことと解釈。ドアを開けたらトキさんは床に組板を置いて包丁を使つていた。卓袱台を布巾で吹き始めたら、悲鳴のような義母の声。

「あつ」  
布巾を反したら、真つ黒。私の方が恥ずかしかつた。

町野へ行くと、

「明日 葬儀場から火葬場へ主人運ぶのに輝昭さんの車出してもらえないかしら」姉が言う。

「えつ うちの車汚い。おまけにバカと書いてある」家の駐車場が登校班の集合場所になっており、夫の「フランス人は車を買つてから売るまで一度も洗わない」と理由にもならない理屈により、車は汚い。班の子等がそこに手で大小のバカを面白がつて書く。アメリカから昨日帰っているはずの夫に電話

「帰つてから町野さんに何度電話しても出ないし、横

涙も居ないし、千早に行つてるとは考えもしなかった。なんで千早に行つたの」とまくし立てる。何故かブン怒っている。葬儀にも出たくないらしい。

(子供たちを連れ込んだことで、トキさんの逆鱗が夫に向いたのだろうか)

お通夜については殆んど記憶がない。ただ人々に付いて動いていただけらしい。ただ裕くんの医大の学長、義兄の友人が

「これからは裕之君の親代わりになって、面倒を見ます」と挨拶した。

千早に帰ると夫がいた。

翌日、要町へ行く。竜一郎さんの弟のタイジさんは見えなかったが、姉夫婦が寢室にしていた和室に彼と同棲しているイワイさんがいた。かつて、一徳さんの返子の家に行く道ですれ違ったイワイさんは、ごつい彼とはうらはらに楚楚とした人だった。昔、東海大学学長の松前なにかしの彼女で、病院に診療室を持っていたこともある。しかし、今は骨太の地金が現れかけている。挨拶すると

「貴方のお母様にお兄さんの診療所の土地探しを頼ま

れていたのよ」母は自分勝手に子供たちの将来計画を立てる人だった。イワイさんの奥で男物の喪服にアイロン掛けをしている黒スーツの人がいる。ダラダラしてるではないが、どこかフワリと身が入っていない。空虚な感じが伝わって来る。イワイさんに

「ねえ もうタイジさん病院に入れなきゃダメだよ。

もう だめだ」とその人がのっそり言う。

姉に

「あの人 誰」

「フクちゃん きちがい」

イワイさんに、早稲田を出てすぐ統合失調症になったフクちゃんという娘がいるとは聞いていた。イワイさんにしても、着物の喪服にはどうかなあ、と首を傾げてしまう。小さなピンクのりぼんが、いっぱい七十近いイワイさんの髪に飛んでいた。

後に、フクちゃんの放火でイワイさんは焼死することになる。

食卓でたばこを吸っているイワイさんの弟の一徳さんは、貧乏ゆすりをしながら

「妙ちゃん 僕をだましたね。どうして僕に教えてくれないかった。病院に行くことも出来なかったじゃないか。なんで嘘ついた」ごつい顔に悲痛と非難が溢れて

いる。カズちゃんは二、三度義兄について電話で聞いてきた。そのつど

「働き過ぎて肝臓をやられたらしいよ。時々入院して療養しているらしい」と説明した。それが周囲への姉の指令、姉妹の申し合わせだった。

横浜の母は父の介護以前から腎臓を悪くしていた。食欲を失くし、食事とは言えないものを口にしてる。

そして、自身の父親の夭折に始まる、兄弟二人の戦死。

二人の息子の死。父を送った後は残り物の気力だけが母を支えていた。そこへ竜一郎さんの発病は母には酷すぎる。悟られてはいけない。当然母は義兄が顔を見せないのが不安を募らせ、土持さんに疑問をぶつけた。土持さんは役者だった。

母が逝った時、姉妹は隠しおおせた？その点だけはほっとした。

夫の車は何故かすつきり洗い上げてあった。

義兄の葬儀は、小川日赤病院葬として、東松山の火葬場に隣り合う葬送場で執り行われた。

昔、草津・軽井沢へ町野と横浜合同で二泊した。白山根山を湖へ向かうとき、足を悪くしていた父が歩きやすいように、小学生の裕くん達が石を除けて道を均し

たりした。帰路、東松山で食べたトンカツは絶品だった。それ以来の東松山だった。

和服の喪服の姉の耳にダイアのピアスが光っている。姉は五十才で義兄を亡くしてしまった。

「親戚を代表して挨拶して欲しいの」夫に姉が言う。

「普通お義兄さん側の親族がされますけど。」

「竜一郎の方は東京の姪が一人来ているだけなの。日頃行き来のない姪だから、無理」

高齢の義母は無理にしても、義兄には伊丹に立派な家族持ちの姉と妹が存在する。

病院葬は講堂みたい広い空間に三百人を超える人達が集まった。余りの人数に紛れ、姉一家、妹夫婦以外見知った顔がない。

僧侶がまた偉丈夫。その上、宗派は分からないが高い頭巾を被り、迫力のある大きさだった。読経もドラマティックで完全に会葬者を掌握している。

焼香が済み、挨拶が始まる。葬儀委員長、遺族代表の裕之、親戚代表の夫。彼の挨拶は何度か聞いているが、

今回は出色の出来で驚いた、とても即席とは思えない。あとで夫は

「お姉さんに渡された原稿通りだもん。そのまま言え  
ばいいんだから簡単だよ」

出棺は、会計士をやっている北池袋の従兄の黒いシ  
ーマが使われ、ほっとした。(夫の車じや竜一郎さんが  
かわいそう)しかし、頼んでおきながら、一言もなし  
に無視する姉の常套手段は、結婚後に取得したものだ  
った。

北池袋の叔父が義兄にSOSを発した時には、癌は  
進行し既に腹水が溜まっていた。医者嫌いの叔父はこ  
こまで耐えていたのだ。叔父宅へ、町野夫婦と歩いて  
二十分はかからない寡黙な夜の道。何も知らされてい  
ない叔母(母の妹)はそれなりに賑やかだったが、家  
全体は重かった。私を挟んでそれぞれ一歳違いの従姉  
妹達は、雨の子猫のように寄り添っていた。叔父の死  
後

「そうだったの。癌じやあ竜一郎さんもお手上げね」  
にわか雨が上がって急に晴れたように叔母は言った。

お清めの席の従兄の隣にこやかに

(感じのよい凄美美人が座っているな、誰)

従兄が結婚できなきや死ぬの生きるの七転八倒、感涙  
を流しながら結婚、叔母の家に入った妻だった。月日

の流れより速く、従兄はホステスに入り浸るようにな  
る。トンチンカンな叔母はホステス側について、妻を  
追い出そうとした。今、三人から硝煙はただよって来  
ないが。

「女房がね、毎日毎日、一匙ずつ塩を盛るんですよ。  
私の食事に」往生際の悪い従兄だ。実は女房は彼の食  
事を今は一切つくらない。彼の洗濯もしない。

その後、従兄は若くして脳出血で寝たきりになり、  
叔母は嫁さんと喧嘩しながら百まで生きた。

裕くんは学友に囲まれてニコニコしていた。そのグ  
ループに栄養士の加代子さんがいた。しばらく後に裕  
くんは大柄日本の美人の加代子さんに手綱を引かれる  
身分になる。

竜一郎さんの姪はお清めには残らなかった。

歩けないトキさんは次女的美智子さんに香典を託し、  
勿論欠席。千早の姉達はお清め半ばで帰って行った。

葬儀の仕切り方にビールを貰いに行ったとき

「これは病院葬ですから。親戚の方々は・・・」

(町野家の葬儀はまた町野の方で当然してもらいた  
い)意味だとわたしは解釈した。姉が義兄を病院に見  
舞わなかったことも根にあるかもしれない。

この葬儀での姉の役割は、遺族席に座ること。遺族代表と親戚代表を選出。出棺の車の用意。後は病院のレールに乗ること。

暗くなって千早に帰った。私は要町で着物を着換えて荷物が多く、夫に先に家に入ってもらった。草履やらあれこれかき集めて玄関を跨ぐと、トキさんたちの争う大声。不審に思いながら

「ただいま」靴をはいたまま声を掛ける。喪服の美智子さんが天狗のように飛んできて敷居に仁王立ち。

「妙子さん。あんた。一体なんで町野さんのこと黙ってた。見舞いに行けなかったじゃないか」

「横浜の母に内緒にしたかったから」その後の罵倒の嵐は驚愕と恐怖で腰が萎えそうだったが、外に逃げ出せた。

（このまま電車で秦野に一人で帰ろうか。もう、千早のことは知らぬ半兵衛、逃げの一手、私に丸投げのドケチ亭主とは別れるしかない。だいたい、なんで私が怒鳴られなきゃいけない。）しかし、家の鍵をいれたバックは家の中。街灯の少ない夜道をトボトボ廻って気を落ち着かせた。

実家へ戻ると、夫と子供たちが荷物を車に積み込ん

でいた。（秦野への無事到着のためには、夫をいらだたせちゃダメ。口にチャック）

そもそも、姉弟三人揃ってマザコンである。無理もない。義父はほとんど家族から逃げ回っていた。夫は小学校入学時まで母、姉たちと長野の疎開生活。戦争で焼けなかった千早に戻れば戻ったで、入れ違いに教員の父は易者の御託宣とかで関西で印刷業を始めた。

自分一人を養うのが精一杯だった商売から父が手を引いて帰って来た時は、夫は大学生になっていた。あの女子大生そのものが珍しかった時代に、小学校や幼稚園の教師の給料で、姉二人にピアノを習わせ、国大を卒業させた義母は死にも狂いの鬼子母神だったに違いない。トキさんと子供の絆は固い。

正月二日

「喪中でどこにも行けないから、家に来たら」横浜と町野一家が秦野に来ることになった。その際

「お義母さん、乗せて行ってもいいわよ」姉はよく（○としてあげる）と繰り返すが、乗ったことはない。歩けないトキさんは初めての一人の正月をどうしているか、美智子さんが近くにいるけど、気がかり。姉の好意に乗り

「お願いできる？」とたんに姉の声が低く変わる。  
「いいわよ」（イイワヨじゃないんだ）

トキさんは着物に毛布みたいな生地、大きな襟付きマント？で現れた。姉の息子たち二人に両脇を抱えられ、ソロソロ玄關へ。

夕食後、小さい子供たちが眠くなる前にと、横浜は先に帰った。残った人たちでゲーム・ランプで盛り上がっているうち、泊まっていくことになる。トキさんは何時もの玄關に近い和室で寝た。

十時近かったと思う。横浜のゆっこから電話があり「松尾さんから電話で、町野にドロボーが入って警報機が鳴りっぱなしになったって。おまわりさんが止めたけど」

裕くんが町野に電話すると受話器を取ったのは警官だった。姉宅は犬を盗まれ、もう一度は侵入され、その後、防犯ベルを張り巡らした。そもそも、家の敷地から四方向の異なる道路に出られるおいしい家なのだ。

今回、ドロボーはガラスを割り、戸に手を掛けたところだけでたましいベル。すつとんで裏木戸を壊して逃げたと警官。家族が帰宅するまで張っていて調書を取りたい、取り合えず帰宅をお願いされた。

「香典は鍵盤じゃなくピアノ本体に隠してきた」裕くんは自慢げ。

「いくらくらいあったの」  
「三百五十万」病院葬は、費用は丸抱え、香典は遺族へなのだ。

夫がトキさんの部屋に行き、起こした。

「とにかく着物だけ着て。急に帰ることになったから」歩けないトキさんが着物に手こずってないか、何か手伝うことはと部屋にいくと、既に着物とマントを着たトキさんが、灯りの下に正座している。傍らにバック。部屋はいやに片付いている。（何か変だ）

町野一家がワサワサ荷物を抱えて出てきて、ガヤガヤとトキさんを連れて帰った。

見送って戻り、まだ灯りのついたトキさんの部屋のぞいた夫が、

「おふくろの歩けないは芝居だ」

夫が母のために敷いた布団が、押入れに仕舞われていた。すごい、早業。